

念願の五七一番地に起つ

昭和五一年四月一日に再製された「改製原戸籍」は、前戸主が慶三さんと、戸主には次男の公平さんが納まっていたが、昭和三年一月に、享年六〇歳で鬼籍の人となっていた。以下、現在の戸主である侶則さんまでを、この戸籍から窺えるものを列挙してみる。

●愛媛県上浮穴郡久万町大字西明神村五七一番地

前戸主 正岡慶三

●大正五年二月一日前戸主慶三死亡ニ因リ家督相続届出

父 亡正岡慶三

石田シズエト婚姻届出大正七年十二月十二日受付

母 ナミ 二男

昭和一八年九月一日町村廃置ニ因リ本籍欄中「明神村」ヲ「久万町」ニ更正

昭和三三年一月二四日午前八時四〇分本籍ニ於テ死亡

同居ノ親族正岡侶則届出受付除籍

戸主 正岡 公平

明治三〇年一月一九日生

●明治四〇年九月一日當村大字西明神五七一番地正岡重吉養子協議離縁届出

大字西明神五七一番地正岡重吉妻クラ養子協議離縁届出

父 亡正岡瀧右衛門

母 亡キミヨ 長女

昭和四年七月八日午前五時三五分本籍ニテ死亡

祖母 ユキ

嘉永三年二月六日生

●明治二三年四月一日當村大字入野三一番戸八鬼助衛へ養子縁組 届出

父 亡正岡周平

明治二三年四月一四日正岡慶三ト婚姻届出同日入籍

母 ユキ 三女

昭和一九年七月八日午後四時三〇分本籍ニテ死亡

母 ナミ

明治六年一〇月一四日生

長々と「西明神五七一番地」を本籍とする人々の動きを記載したのは、その一行一行に塗り込められている血族の喜怒哀楽と時代の変動が嗅ぎとれるかどうかを試みたからである。瀧右衛門さんの長女で実質的な「正岡家」の血脈継承者であるユキさんは、重吉・クラと養子離縁してから二五年後の昭和四年、七九歳の長寿で他界している。慶三さんの妻・ナミさんは明治六年生まれである。祖母のクラの一歳下か。どんな会話を交わしたのだろうか。こうした血族の記録はプライバシーに関わる微妙な箇所が

あるので、その取扱いについては、これからも慎重に配慮しなければなるまい。

「やすらぎの里でんこ」の喫茶室で、江戸時代末期から昭和初期までの「正岡家の人々」の「生きた営み」に目を通しながら、これからどうやって「西明神・正岡家」の玄関の呼鈴を鳴らしたのか、思い悩みはじめていた。一〇〇年前に一五年間だけ養子として関わった一家の後裔が、突然に親戚でござい、と名乗り出たとして、どうなるというのか。

心が重くなった。西明神村はやつぱり、結界の中にあった。

国道三三号線を、ほんのちよつとだけ松山方向へ戻った。右手に木立ちに囲まれた神さびた一画が見える。高殿神社の杜と分かっていたが、やり過ぎた。いずれ、ゆつくりと足を踏み入れなければならぬ重要ポイントの一つである。左手にJ A明神へ入る細い道を見つけた。危ない、危ない。うっかり、通り過ぎてしまふところだった。「ゼンリン住宅図」は、しつかり頭に叩き込んであつても、平面図からは高低の次元が伝わらない。道なりに村の中心へ登っていく感じ。水田の脇を縦横に走る水の音。道幅は軽自動車がやつとすり抜けて行ける程度。ヴィッツにしておいてよかつた。二股道に差しかかつた。一旦、クルマから降りてみる。やつて来た方向を振り向いて、おどろいた。想像を超えた豊かな

田園の正体を、ぐるりと周りを巡らせた山林の壁で、外部からは村の有様が見えない仕組みになっているのが、よくわかる。ということは、外から紛れ込んで来た者は、確実に村人の監視下に置かれていると考えるべきだ。人影一つない、午後四時の明神村。背筋に、ぞくり、と来るものがある。

風呂川橋。うん、ここだ！

うっかり見過ごしてしまいそうな小さな石橋だった。が、橋の名前に憶えがある。「ゼンリン住宅図」によるシミュレーションで何度も渡った橋ではないか。すると、この風呂川橋の袂にある二軒家が、正岡姓をもつ「富良」「敏樹」宅ということになる。ごく自然に屋敷の奥に隣接する墓所を認めていた。背後に古墳に似た小山と竹林。畦道を下つて行つて、確かめに行く。真新しい御影石の霊標に「剣酢漿草(けんかたばみ)」の家紋が刻まれていた。周平・慶三さんの家紋が五三桐かどうか、気になり出した。

【私註】「剣酢漿草」を家紋とする正岡氏は、竜岡幸門系が多く、子規系もそれに属する。鳩酸草、片喰草とも書き、俗にはスグサ、スイモノグサとも言われ、鏡を研ぐのに用いたので鏡草とも名づけられている。茎は太く、四、五月頃に、小さな黄色の花が咲き、きわめて繁殖する性質を持つ、という。この繁殖性をとつて一門の繁栄を祝福するために家紋としたという説もあるくらいであ

る。が、形状が優雅で紋章化しやすいという尚美的意義をとる向きもある。戦国時代には長曾我部氏、徳川時代には酒井氏の代表家紋として用いられている。ただし、剣と合成したものではない。（『要綱・日本紋章学』を参照）



明神村栄谷の中心にどっしり構えた正岡倍則家

■どっしりと時の流れを見守っている藁葺き屋根の民家

車幅を気にしながら、やっとの思いで風呂川橋を渡った。久万川に注ぐ、せせらぎに近い小川だった。灯りのない夜道などは、余程、気を配らないと危険だ。ゆっくりと右手の坂道を上っていると、小高い丘の上に出る左手前で、洋風の洒落た造りの二階建てと、どっしりと時の経過を凝視してきたような入母屋造りの藁葺き屋根を冠った農家が蹲っている一角に出た。その新旧の建物が同居する間の空地で、茶髪の青年がクルマをいじっている。視線が合う。サバンナRX7の改造車を見た。が、一瞬のうちに通り過ぎてしまう。ともかく、どこかにヴィッツを駐めなくては。手前が「健司」宅、農家の方が「侶則」宅だと直感していたからだ。すぐに丁字路に突き当たった。僅かに駐車できそうなスペースが草叢の脇にある。

デジタル・ビデオ・カメラを回す。谷間の高みにあって、東西両明神の里全体が見渡せる絶好の場所、というのが氣にいった。たっぷりと緑の精霊たちをあやししながら微笑んでいる山並みの中で、右手に見える、あの哀れな姿を曝している山は何だ。ただ独り山肌を半分も削られ、悲しげに身体を縮めている異様さは、九州・筑豊の香春岳の無残さを連想させた。

ふと、だれかに見つめられている気がして、カメラのファインダーから目を離れた。棚田の間で、そこだけはビニールを覆っ

た野菜畑となっていて、麦藁帽子の年老いた男女が、草むしり作業の手を休めてこちらを見ている。見事な白い顎鬚が、まず目に飛び込んだ。黒く、深く、透き通った目。まるで、ぼくの来訪を知ってでもいたような、親しげな眼差しだった。

「今日は。ちよっとお尋ねしてもいいですか？」

どうぞ、という感じで、お二人は腰を伸ばしながら、立ち上がり、頷いてくれる。

「あの、無残に削り取られた山は何という名ですか？」

「大除城」

「えっ、あれが有名な大除城ですか……」

ぼくは絶句する。久萬山の象徴の一つである山城を削り崩すとは！

「ほう。そんなに有名ですか。大除城はその奥で尖った山が見えるでしょう。そっちですが、ま、削られた山も大除城の一部だとはいえませう、な」

麦藁帽子を脱いで、農夫がこちらへ近づいて来る。大柄だ。それにしても、なんと印象的な白鬚だろう。みぞおちあたりまで、垂れ下がっている。高僧、という感じじゃないか。

こちらから名乗る。五七一番地の「正岡侶則さん」を訪ねてきたことも。

「わたしが、正岡侶則です」

「やっぱり」



入母屋造りの侶則家の母屋



西明神の景色に似合い過ぎるおふたり

口にくそしなかったが、ぼくは予感していた。そばで奥さんらしい農婦がにこやかな笑みを湛えて、小さく頭を下げる。改めて、こちらの来意を率直に告げた。

「そうですね。随分と昔の話で、わたしもよう知らんけど、まあ、立ち話もなんだから」

一つには、父方の祖父が一時的にしる養子として身を預けた「正岡家」をお訪ねして、そのころの事情が分からないだろうか、という点。もう一つは、伊予の領主・河野一族を家老として支え

てきた正岡氏が、北条、玉川町竜岡の拠点のほか、この久萬山をかなりの数が本拠とするようになったのは、何故か。いつの頃からか。そんなことを伝えたあとで、先刻、入手したばかりの「正岡慶三さん」を中心とする除籍謄本で説明するのも失礼なので、まず「重吉・クラ」の謄本の方をバッグから取り出し、「西明神・正岡家」との関わりを見てもらうこととした。しばらく謄本に見入ったあとで、

「これは、間違いないです。あなたさんのお祖父さん、お祖母さんは、ここの正岡家の一員でありますなあ」 侶則さんは大きく頷くと、歩き出す。随いていらつしやい、という意味だろう。ぼくは夢見心地で後を追う。

背筋をピンと伸ばし、ゆったりと大きく踏み出す。なんて人を惹きつける歩き方だろう。つい後から従って行きたくなるその吸引力は、生来のものか、それとも後年の生き方が培ったものだろうか。侶則さんの足が停まった。屋敷の手前の納屋の脇に、背の低い雑木に囲まれた小高い丘があって、手を合わせたくなる特別な靈気が伝わってきた。背丈ほどに石墨を積み上げ脇を固め、その上が台地になっている。アルミ製の梯子がしつらえてあって、楽に登れるようになっていた。藪の奥にあるのは、祠ではなく、墳墓らしい。

「押んでいきますか。うちの五輪さんですが」

勿論です、と応えてから梯子に手をかける。一段、二段、三段。

目の高さに五輪の石塔の先端部が顔を出した。空風輪と呼ばれる帽子の部分だ。やがて、五輪全体が見えた。高さは一メートル強か。五輪は「基」だけ。周りを一〇基ばかりの墓石が取りの囲んでいる。「五輪さん」は苔蒸していた。火輪と呼ばれる胴体の所々に、石の剥離した痕がある。いつの頃のものか。多分、西明神・正岡家の遠祖のもので戦国時代後期か江戸初期だろう。あたりは落ち葉が敷き詰めてはいるが、手入れは行き届いており、荒廃した感じはない。

侶則さんは「五輪さん」に手を合わせてから、こう解説をしてくれる。「父が亡くなったときに、ここにあった一族の墓を整理して、むこうの山の麓に移しましたが、この五輪さんだけは、然るべき手続きをしなくてほと、押んでもらったところ、この供養塔は六〇〇年ほど前に、いまの知事さんより偉い人のもので、動かしてはならん、と言われましてね。伴が七人も随(つ)いているとも。あれは冬の寒い時でした。池の水が凍っておりましたが、それを家内と持ち出してこの石をたわしで洗ったのですが、手がカアーツと熱くなりましてね、あれは不思議でした。あれから、

毎日、お線香を欠かさずあげています」

五輪さんは、お酒が好きで、頭からかけてあげると、それは見

事な色を出す、と侶則さんは屈託なく笑った。ぼくの夢見心地は、まだ続いていて。西明神・正岡家の当主の解説を受けながら、伝来の墓所に立っているという、この現実を信じていいのだろうか、と。

五輪塔を護衛する形で散在する墓石に、刻まれた法名のうち、比較的新しいものは解読できた。「往寛行生」と「往寒徳生」は夫婦だろう。一つの墓石に、2行で収められている。



小高い塚の上で五輪塔が一基、古墓たちに囲まれて……。

微かに「天保」という年代が読み取れなくもない。「寒山淨白」「善室妙念」の二行はもつと新しく明治に入ってからのもらしい。

【後註：前者が五代目の嘉七・かね夫妻、後者が7代目瀧右衛門キミヨ夫妻】

四十九歳・当主慶三さんの死

長い一日もやっと終わった。西明神の正岡家を辞してから、北条市辻町の「門田旅館」へ引き返した。近くの中華料理店で夕食を摂り、部屋に落ち着いた時には、もう午後一〇時を回っていた。

この日は午前四時半に起き、東京練馬区の富士見台駅を五時三〇分発の西武電車で池袋へ出、山手線とモノレールを乗り纏ぎ、七時二五分羽田発の全日空機で松山空港に着くと、レンタカーを受け取って、真っ直ぐ北条市役所へ。そして、久万町役場、明神の里。還暦を越えた当方にとって、なみの強行スケジュールではなかった。それにも拘らず、部屋に戻ってからも、この日の出来事の記録、入手した資料の整理に手をつけ始めたのである。プツプツと身体中の細胞が音を立てて活動してしまうのだ。

■3組の夫婦の肖像写真

「五輪さん」にお参りしたのが、正岡家の内部へ招かれる通過儀式だった。先程、敷地でクルマをいじっていた青年はそのままの姿を続けていた。やっぱり侶則さんのお孫さんで「慎司です」と名乗ってくれた。屋敷の玄関口へと案内された。普段はもう使用しなくなっているらしく、
「手がかかって、かなわんですよ」

と、侶則さんは白い顎髭の中の口許を崩して、苦笑いする。なるほど、表戸を開くのにかなりの力がいった。きしむ音。道場の框（かまち）に立った感じである。

靴を脱いで入った所が、すぐに客間になっていて、高い欄間から三組の夫婦の肖像写真が、こちらを見下ろしていた。中央でピンと口髭を反らした偉丈夫が「慶三さん」だと、すぐに分かる。右端で紋付き姿の、少しぼやけた感じの丸顔の方が……？

「曾祖父さんの周平です」

時が一気に一〇〇年を逆走していく。初めてその名を耳にしてから、ひたすら文献資料から痕跡を拾い上げ、繋ぎ合わせて追跡してきた。やっと今、あなたに逢えことが出来たのですね。熱く、こみ上げてくるものがあつた。周平さんの、こちらを見る眼差し、なんと優しいことか。左がユキ夫人だ。七代目・瀧右衛門さんの長女だから、正岡家正統の血脈はこの女性を経由して保たれているわけだ。お俠な印象を持ったのは、つい先刻、除籍謄本から、周平さんの死後一年も経たないうちに、ユキさん主導で重吉・クラ夫婦との養子縁組を裁ち切ったのを知ったからか。

慶三さんの左にいるのが、ナミさんであろう。

「美人ですねエ」

つい、余計な感想を言ってしまう。それほどに整った、硬質な感じを持つ美貌であった。

慶三さんの、いかにも明治時代の地方政治家らしい押し出しと、



欄間に飾られた肖像画 右から周平夫人ユキ、慶三、ナミ、そして公平さん。



下が正岡周平さん

頭の回転の早さを直感させる精悍な目。

「似てらっしゃいますね」

と、水を向けると、ふ、ふ、ふ、と応じる侶則氏。

「慶三さんは大変に有名な手腕家だったそうですね。それが最後に亡くなっていますか、病気でですか？」

「いえいえ、松山城にあがってとってですね、井戸に飛び込んだという話です」

「えっ！」

そう、驚いたのは、いつかどこかで、その話をぼくが聴いていたからだ。なぜだろう。

「いうことを聞かない、やばいおジイさんでね」

なんでも、県議会の仲間と道後温泉に泊まっていた、火事だというので松山城へ上がり、喉が渴いたといってお城の井戸の水を飲もうとして事故にあったという。

「後ろから突き飛ばされたという噂もありましてね……」

〈大正五年二月十一日午前五時三〇分松山市ニ於テ死亡 戸主正岡公平届出〉

除籍謄本にあった不吉な一行には、政友会選出県会議員・前明神村村長正岡慶三の無残な最期が籠められていたのか。この件については、これから調査の要ありか。事故当時の地元紙を当たってみるべきだ。

「激動した、大変な時代だったんですね。政敵も多かった。政友会一八名に対して、ライバルの立憲同志会が一六名、国民党三名と勢力が伯仲していて、危ない空気だったそうですね……」

■慶三県議の足跡

大正四年九月、第一七回愛媛県議会議員選挙で、明神村村長だった慶三は上浮穴郡選出の県会議員となった。多分、絶頂期であったろう。第八六回通常県会で、新人議員としては異例の「大野ヶ原道路修繕」の提案者とし、その名が記録されている。(愛媛県議会記録

による)

渡部綱興

「大野ヶ原道路修繕の建義 正岡慶三(上浮穴)・渡部綱興(温泉)が提案し、一八県議を賛成者とするこの建議は、次のような理由から道路修繕を要望していた。

建議案

一、大野ヶ原線道路中土佐街道分岐点ヨリ参川村字柁小屋ニ至ル間ノ修繕費ヲ県費ヨリ支弁セラレン事ヲ望ム、

理由

上浮穴郡二峯村ヨリ大野ヶ原ニ通スル道路ハ改修後優修繕ヲ怠リタル為メ各所ニ損所ヲ生ジ交通上ノ不便少ナカラズ、併カモ該道路タル小田深山大川山其他ヨリスルハ林産物ノ運搬頻繁ニシテ同地方民ノ恵沢ヲ享クルコト尋常ナラズ、故ニ止ムヲ得ザル破損ケ所ノ小修繕ハ地方ノ当業者等ニヨリテ行ワレツツアリト云エドモ、到底永続スベキモノニアラザル以テ之レガ修繕ヲ県費ニ求ムル所以ナリ、右府県制第四十四条ニヨリ提出侯也、

知事宛

右提出者

正岡慶三

この建議は一二月二日に上程され、読会を省略して確定議となつた」

生活に直結した建議だから、演壇を叩いて獅子吼するような派手なシーンではないものの、県政に確実な足跡を著しつつあった。得意の絶頂だったかも知れない。

位置に十二月二日、閉会。大正五年の通常県会の開幕日には、もう慶三県議は消えていた。

それにしても、と思う。なぜ、松山城の井戸で誤って「お祖父さん」という人が事故死したという話を、ぼくが知っていたのか。出所は父・徳一以外にない。

大正五年、父は十一歳になっている。温泉郡栗井村久保にいたのか。それとも、すでに筑豊地区・直方に移っていたのか、微妙な時期である。(転籍届は大正七年。しかし、大正三年に早逝した五男・亀一の届出は鞍手郡宮田となっている)

徳一少年はなんらかの形で慶三さん(正確には戸籍上の叔父にあたる人)の不慮の死を知る。時間の経過とともに、周平さんの話にすり替わり、ぼくの耳に届くころには、「祖父さん」となっていたわ

けだが、父の「法螺話」と聞き流していた出来事は、ほとんど真実だったのだ。それはいい、としても、田中重吉と渡部クラの二人が、どんな関わりで西明神の正岡家に、揃って養子として迎えられたのか。この旅でそこを究明したい。

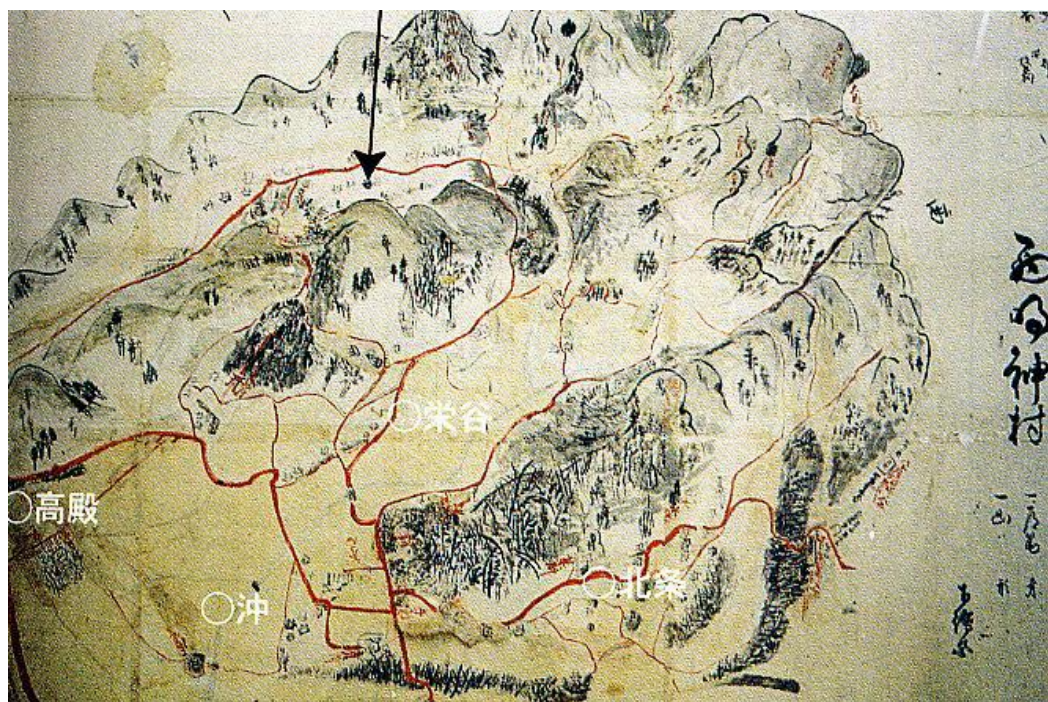
残念ながら、大正十三年生まれの侶則さんも首を捻ったままである。

「さてと、だれか判る年寄がいるかのう」

養子縁組を解除してからは、もう交流はなかったのだろうか。少なくとも、西明神の里から、重吉とクラの匂いは消えていた。それでも、二人は「正岡姓」をお返しすることなく、新天地で暮らしはじめた。そのお陰で、ぼくらは「正岡一族」であり続けた。

「そうだ。わたしの友人で同じ正岡豊というのが表通りでライフ・シヨップをやつとるので寄ってみたらいい。あれは古い話をよう知つとるし、正岡一族についても勉強もしているからね」

侶則さんが助け舟を出してくれたところで、正岡家を辞した。クルマの駐めてある場所まで、夫妻で見送ってくれる。再会を約した。事実、この後、二度にわたって明神の里へ足を運ぶこととなる。



伊予の軽井沢とも称される久万高原・西明神の江戸時代古地図